

2016 推・帰・社

受 験 番 号	
------------	--

医学部保健学科

小論文Ⅱ問題

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで問題冊子を開いてはいけません。
2. この冊子のページ数は5ページです。落丁、乱丁、印刷不鮮明の箇所等があった場合は申し出てください。
3. 問題冊子の余白は下書きに使用してもかまいません。
4. 解答は所定の解答用紙に記入してください。
5. 解答用紙は持ち帰らないでください。
6. 問題冊子と下書き用紙は持ち帰ってください。

1 次の文章を読んで、問1、2に答えなさい。

群馬県上野村。県の南西の先端に位置し、長野、埼玉と県境を接する。村域の96%以上を1,000メートルから2,000メートル級の山野が占め、人口は平成25年4月1日現在で1,370人。高齢化率は42.6%。こうしたデータを示すと、典型的な過疎で不便な山村地域であると受け取られるかもしれないが、人口減少や、死亡・出生のデータを示すとどうだろうか。

一つ目は、平成20年度から24年度までの減少人口は46名だから、単純に、他村に比べて離村者が少ないのではないかと感じたことである。

次に、20年度から5年間で亡くなった方の合計は94名。出生者は36名。差し引きをすると58名の減少になるのだが、いま述べたように減少人口は46名。12名は、他地区から移り住んだ村民だということになる。Uターンに対して、Iターンという言葉を使うらしいが、このIターン組を積極的に受け入れようとしている自治体であることが、データからもうかがえる。

三つ目。いわゆる出生率（人口千対）の全国平均は、平成12年の（9.5）から、22年（8.5）、24年（8.3）と減少傾向が止められずにいるが、単純比較すると、平成22年（2.9）、24年（4.3）と、上野村のそれはさらに低い数値となっている。しかし、高齢化率や年齢別人口構成という補助線を加えた場合、単純な出生率の比較はできなくなるのではないか。少なくとも他の過疎地域の出生率はもっと下がり、上野村は上がるのではないか。

というのは、インタビュー取材の後半になってこのIターン組の話題になったとき、今までの移住者が200名ほどおり、これは総人口の14%になる。一家族の子ども数も3名ほどになっていて、結果、小学校では複式学級（学年合同でクラスをつくる仕組み）は2クラスだけである、と語っていたからである。

さて、何を申し述べたいか。

交通の不便な「山村」「過疎地域」といっても、内情は一律ではないと知ることになった。上野村はほとんどの面積を山野が占め、村の中心を流れる神流川沿いに集落をつくっており、その支流がいくつも伸び、それぞれの沢沿いにさらに小さな集落が点在している。たしかに人口過疎の村ではあるのだが、筆者は、それらの言葉のもつ従来のイメージとは異なった印象を受けたのである。

ある本によれば、過疎とは「地域社会の機能が低下し、住民が一定の生活水準を維持することが困難になった状態」と定義されるという（谷本圭志他編『過疎地域の戦略』所収「過疎地域の今後と課題解決の戦略」より）。だとすれば、上野村はその定義には当てはまらないのではないか。

（出典：佐藤幹夫、ルポ 高齢者ケア—都市の戦略、地方の再生、p.168-171、筑摩書房、2014、一部改変）

問1 交通の不便な「山村」「過疎地域」に対する、筆者の従来のイメージはどのようなものであったか。50字以内にまとめ、解答欄 -1 に記しなさい。

問2 筆者が、上野村は過疎の定義には当てはまらなないと考えたのはなぜか。200字以内にまとめ、解答欄 -2 に記しなさい。

2

次の文章を読んで、問1、2に答えなさい。

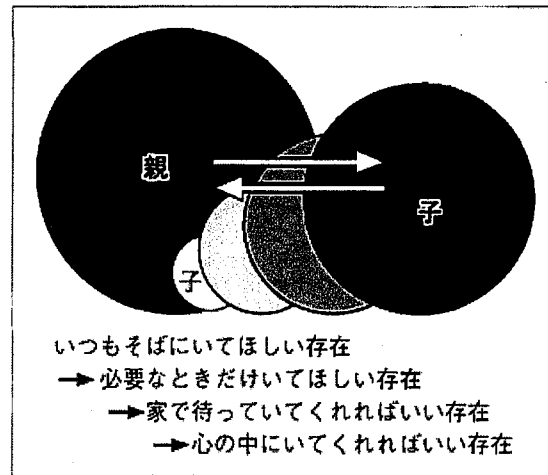


図. 子どもの自立に伴う親子関係の伸展過程を図式化したもの

(石川憲彦 : 子育ての社会学, 朝日新聞社, 1985)

図は自立の過程における子どもと養育者の関係を図式化したものである。自立とは子どもと親との関係が希薄になっていくことではなく、新しい関係に入ることを意味している。それゆえ親にとっての子どもの自立の過程とは、子どもが成長するにしたがって、親自身が期待されている自分の新しい役割、機能に気づき、それを変化させていく過程ともいえる。

しかし自立の過程を推進させる力と抑制する力はそれぞれ親と子の双方にある。子どものうちにある推進力とは、「自分のことは自分で決めたい」という気持ちである。また親にも「はやく自分で判断できる子どもになってほしい」という推進力がある。しかしそれと同時に自立を抑制する衝動も双方にある。子ども側には「いつまでも子どもでいたい」思いがあり、親の側にも「いつまでも自分を頼りにしてほしい」という期待がある。つまり推進力と抑制力の相対するベクトルが双方から常に発信されているのである。この拮抗の度合いが、そのピークに達するのが通常思春期である。(1) 子どもは自己の対立した方向に分裂した心情をもてあまし、解決の糸口を最も身近なおとなである親に求めようとする。

中学3年生の2学期、中学校の銀杏の木もそろそろ黄葉の気配。いっしょにつるんでいた遊び仲間ももう高校受験のモードに切り替わっている。こんな成績じゃ、地元の高校はやばい、自分でもそれは痛いほどわかっている。勉強も嫌だし、いっそ高校なんか行かないで仕事でもするか。ハンバーガー屋でバイトしたこともあるし…。しかし今の世の中、中卒で一体やっていけんだらうか。あんなショボイ親父だって一応高卒だしな。自分で自分のことは決めなきゃいけないことはわかってんだけど…、何だかおふくろ任せにしていた小学校のときがやけになつかしいな。

この当人は母親に向かっては、「めし」、「かね」くらいしか言わないにきび面である。であるから当然そんな相談などは親にしない。その代わりに、「俺のケータイもう古いから新しいのに買い替える」という。母親が「そんな場合じゃないだろ。勉強は…」と言うと、さらに要求がエスカレートしてくる。とうとう最後には「バイク買え」と言い出す始末である。思い余った母親は父親に相談してみるものの、「俺は仕事で忙しいんだ」と、父親は早くも逃げ口上になっている。その夜、息子と父親のとっくみあいのすったもんだがあって、その日以来、両者は口をきくどころか、顔も合わさない仲になっている。

これは現在、北関東のとある特別養護老人ホームで介護主任をしている方から聞いた、本人の若かりし頃の回顧談である。彼は今 32 歳、共稼ぎで女の子が一人いる。地元の G 県 M 市の山間部にある地方都市で、老人ホームで介護の仕事に従事している。20 代後半からすでに主任になっていることからわかるように、入所者、家族、働く仲間からの人望もなかなか厚い。彼のいうところによると、彼のその後の経過は次のとおりである。

結局父親が隣町にある私立の高校の受験案内をもらってきて、運よくそこにもぐり込んだ。高校時代の悪い仲間との付き合いがあって、ソリを入れたり、バイクを乗り回したりしたこともあった。彼が問題を起こすたびに母親は泣き親父とはすぐにけんかになった。そんなことを繰り返すうちに、彼は何となく「親も大変だなあ」と思うようになり、自分にはいったい何ができるのか、そんなこと考えるようになった。年寄りと話すことは嫌いではなかったので福祉系の大学を目指すことにした。

揺れている子どもの要求はどんどんエスカレートする。本当は携帯が、バイクが欲しいわけでもないのである。親にそんな余裕がないことも、できの悪い子どもにも十分わかっている。ただ「早くおとなになりたいけど、今のように子どものままでいたい」という分裂した気持ちをどう処理したらいいのかわからないのである。この葛藤を解決したいために、わざと無理難題を作り上げ、それを親にぶつけ、その反応に手がかりを見出そうともがいているのである。しかし親は、子どもの要求に一喜一憂し、一緒になって揺れてしまうため、子どもにはそこに自分の姿がなかなか映せない。映せないで、これでもか、これでもかと事態をさらにエスカレートさせていくのである。しかし解決はいつも意外なところから与えられるものである。

親と子どものすったもんだが続いている間、揺れてはいるが、鏡はいつも子どものそばに存在していたのである。この鏡がそばにあるということが、人の自立の過程において重要である。子どもは、親との摩擦を通して、鏡が目の前にあることにある日気がつくのである。彼によると、土壇場のところで、いつも何かしてくれたのが親だったそうである。それに気づいたことが、自分の将来のことを考えるきっかけになったそうである。そういう力を仮に「家族力」と呼ぶこと

にしよう。その家族力が、子どもが自分の足で自立しようとする過程を促進させるのである。

出典：「発達障害の作業療法 基礎編 第2版」 p. 105-106、三輪書店、2015年(一部改変)
岩崎清隆 著、 鎌倉矩子・山根寛・二木淑子 編

問1 下線部(1)の結果，子どもはどのような行動をとるのか，筆者の述べていることを50字以内にまとめ，解答欄 - 1に記しなさい。

問2 子どもの自立の過程で何が必要か，本文中の表現も使用しながら，あなたの考えを200字以内にまとめ，解答欄 - 2に記しなさい。